

蹄の痕(七)

明治三十一年十月十五日小代、久米、岩村、佐野、高島、黒田ノ五名筑波へ赴ク。此日土浦松庄方ニ宿ス。十六日筑波山ニ登リ眞壁ニ到リ橋本屋ニ宿ス。十七日岩瀬小山ヲ經テ歸京ス。

○京都和田英作より東京黒田宛

(十月二十四日)

拜啓先日會場にて御面會仕候節は取急ぎ居候折とて誠に失禮申上候御宥恕被下度願上候一昨日午後新橋發昨日拂曉五時名古屋着名古屋城など拜觀致し米齋氏にも不計面會致し候午後四時半名古屋發昨夜九時當地着致し當今玆に陣取致し候當地紅葉は未だに御座候本日清水寺に參り候處例の三階造りの蕎麥屋あたり五六本梢ばかり少し色づきたるを見たるのみに御座候鴨涯の風光いつ見ても心地よく御座候朝霧深く兩岸の柳樹を罩めたる状などは誠にたまらなく御座候今晩堀江氏を訪ふつもりに御座候明日よりいよく例の仕事に取懸るつもりに御座候一ト月以上滞在致度願ひ居候へども如何相成べくや先は不取敢右申上度可祝

○黒田より久米宛(端書)

(十月三十日)

料理の事を聞合したら

一人前一圓十錢 品數は四ツ但し酒は無し

大抵普通の宴會は皆此直段ママでやるそうだ

女中の祝儀は一人に付五十錢が通例で三十人の客に對して七人出す

來月四日の晩までは前約が有つて座敷がだめ五日は土曜だと思ふが其日に極めてはどうだ

○京都和田より東京黒田宛

(十一月八日)

御手紙賜はり難有御禮申上候丁度去る二十九日より五日間加州金澤越前福井敦賀へ隨行最中にて歸京後拜見仕候御示しの趣委細了承フ氏に傳ふべきは相傳へ候間左様御承知被下度候繪入カタログは十五日ならでは出版相成ざる由落膽仕候フ氏も小生と等しく一日も早く見たくものと相願ひ居られ候

日々朝夙くより日没まで博物館出勤にて未だ當地は只一度清水を見たるばかり何處も見ず頗る残念に御座候されど博物館への往復に相眺め候大根洗ふ三條の朝霧白布晒す五條の夕照いつも鴨川の風光はうつくしくなつかしく候

兩三日中には高雄へ參るつもりに候夫れより奈良高野といよく長途の旅行に出懸ける事に御座候可祝

○京都和田より東京黒田宛

(十二月八日夜)

拜啓仕候

六日夜附けの御手紙只今落掌難有拜誦仕候會も最早明後日までのよしいよく御名殘と相成候三河屋の會合はさぞかし面白かりし事にて候ひしならむ諸所の名所を見物して居る身でありながら忿張つたる事ながら其席末に列する能はざりしは残念に御座候又山本先生や岩村氏などの面白き十八番も御座候ひしならむ山のとんかしら

やおじやるやらいろ／＼の會歌も出で候事と奉存候

吉岡君の病氣には驚入候左様なる病氣なれば少しは長引き候事と存じ候誠に氣の毒なる事に候早速見舞狀差出すべくと存じ居候

小林新花むこ萬歳に御座候小林もしばらくはひやかされる事と察し候

伊勢參宮の紀念の爲め曆御送り申上候ところ御禮に預り恐入候今度奈良より高野山十津川を下りて熊野那智夫れより伊勢參宮して歸京したる此三週間は中々に興味深く候ひき十津川で薩摩芋と米の飯ばかりで異人夫婦が満足したるには感服いたし候那智の瀧は音ばかりで一切感服せず高野山にて只精進料理が甘かりしのみ伊勢にて古市の伊勢音頭といふやつをフ氏等と見物いたし候いやはや夢を見る様でアツケラカンといたし候初めは舞臺がせり上るやら欄干が現はれ懸け行燈がズラツと下るやら拍子木で大勢踊りながら出て來るやら中々面白さうなりしも三分間程經つとパタ／＼とお仕舞になりしには意外千萬所が所なれば狐につまゝれしにはあらぬかとも思はるゝ位にて候ひき

此度は當地には僅か三日間滞在いたしよ／＼明朝八時幾分かの汽車にて廣島へ參り宮島を見物いたし山口に一日滞在長崎鹿兒島を経て琉球へわたるつもりに御座候梅の花さく頃には又當地に立かへる筈に御座候

學校では皆々定めし勉強いたし居らるゝ事と奉存候私も歸京の後は一心不亂に勉強いたすつもりに候油畫の箱は持參いたし居り候へども自分の時間としては夜も十時過ならでは無之候故到底板のスケッチも出來兼ね候然し自分では見られぬ處も見又山やら海やら丸で風俗の違ふ琉球までも參る事なれば之が大變な勉強になる事とよろこ

び居り候

いづれ長崎より又々一左右御伺ひ申上べく先は右申上度可祝

○長崎和田より東京黒田宛

(十二月十六日)

京都へ宛御送附被下候御手紙當地に於て難有拜誦仕候フ氏へ御送りの洋書新彩うれしく拜見いたし候御傳言はフ氏へ相傳へ候フ氏は寫真が馬鹿に悪いと寫真屋をうらみ居られ候私は此カタログがせめて會期中に出版ありしならばと残念に存じ居候

京都にては知らぬ事とて安仲氏には出遇はず残念に候尤も知りたればとて主人持の身の暇なければ反つて知らぬ方がよかりしかも知れず候

去る九日京都出發其夜は岡山泊後樂園見物十日廣島着其夜フ氏夫婦と本川橋畔(川の中の船)にて牡蠣を喰ひ候飽迄喰ひ候故定めし勘定が高からんと思ひしも案外廉價なりし爲めフ氏の驚駭一方ならず候ひき十一日宮島を見物して三田尻泊十二日山口にフ氏の舊友が高等學校教授になりて居れば同氏訪問其人も異人なれば此の處少しく通辯は閑暇にて候ひき十四日山口より三田尻に引返へし徳山より汽船に搭じ其夜門司に一泊十五日門司より汽車にて長崎へぶつ通し其夜九時半即ち昨夜十時過當ホテルに着仕候

始めて歐風のホテルに宿泊候事とてチャンのボーイやら食堂やら面倒くさくて閉口いたし候日本にあるホテルで一人の日本人無きには誠に閉口いたし獨りマゴくいたし候明夕六時鹿兒島行の汽船より當地出發いよくわらじふんでおじやる事に相成候手品見物ではなけれどドンナお化けが出るかおやぢが出るか頗るたのしみにて待兼居

候鹿兒島にては到底寸暇もあるまじければ垂水をながめて次團太踏まねばならぬ事と奉存候先は只々右申上度可祝

○熊本和田より東京黒田宛端書

(十二月二十一日朝)

一昨朝長崎出發有田の陶器業見物いたし其夜當地着仕候阿蘇山へ登るつもり候處雪と霜の融るにて泥濘甚だしとの事にて取止めいたし候間明後日三角發の淡水丸にてオジャル事に候之も風あれば妻君が氣の向かぬ故中止となるやも不計候

十八日夜長崎より少々名物を御歳暮の印までに小包郵便にて御送りいたし候御笑納被下度候久米先生の御住所失念候故同封に致し置候御序の節御届け被下候はゞ幸甚の至に御座候

◎明治三十二年

○東京吉岡育より駿州靜浦保養館佐野、菊地、安藤、黒田、久米、磯谷、辨滑宛端書 (亥年一月五日)

昨夜はがきに接す

初東風に靜浦便り聞きにけり

正に是れ白馬ならべて七騎落

坊主よりお布施出したは奇談なり

願以此功德施一切元なまのおごり哉

菊鑄があるけぬさまぞおかしかる

亥の子へたはる尻にこそ似れ

大屋さん鼻息あらくみのしゝの

一足飛にお役人さま

元日や富士もの一句出来したり

藤澤の二の舞ありや言同はん

菊ひくゝ安藤ふとく久米高し

(磯谷の海しづか松はそよく富士高しに倣ふ)

此ごろは頭は少し軽い方

併し未だ薬瓶さげて醫者通ひ

耳病を餅に搗きつゝ年の暮

元日は上天氣二日三日は薄日和

町中は天氣續きで少く景氣

成る口の猪口も取れぬで大よわり

合田の年始狀房州より來りけり

思ひきや京より和田の年始狀

病中の元日

元日や凧の音遠く眠氣さす

政客におくる

明けて又た牙争ひの猪年かも

一寸讀込みの都々逸を

こゝろ静浦ほようをするが

主のたよりを松の内